

近森病院附属看護学校 学校関係者評価・自己評価

(評価期間:2022年4月1日~2023年3月31日、公開年度:2023年度)

1.学校関係者評価 総評

2022年度で、本学は開校から8年目を迎えた。この間、新型コロナウイルスの感染拡大など困難な状況もあったが、新カリキュラムを導入するなど、非常に熱心な教育活動を行い、教育改革に努めてきた。コロナ禍もようやく収まり、本学はより大きな発展を目指す時期にさしかかっている。そのためには現状に満足することなく、教育研究のさらなる充実が求められる。そこで、本年度から評価基準の見直しを行った。

これまでの4段階評価は変わらないが、その基準や解釈を変更した。「4.優れている」は「十分な成果が上がっている」、「3.当てはまる」は「確実に実施している」、「2.やや当てはまる」は「確実に実施しているが、計画や要項などが十分に整備されていない、または実施が不十分」、「1.当てはまらない」は「計画や要項を定めておらず、かつ実施もしていない」とした。評点3が標準であり、評点4となるには計画を実施した上で、さらに大きな成果を上げることが必要になったのである。

そのため、本年度の評価は、前年度までに比べて全体的に低くなっている。しかしこれは基準の改訂によるものであり、決して本学の取組が後退したためではない。実際、本年度においても、すべての項目で評定平均値が3を超えている。ただ、基準の改訂によって、本学が重点的に取り組むべき課題も明らかになった。具体的には、教育目的や教育目標、経営管理、卒業・就業・進学について、より一層の取組や工夫が必要と考えられる。開学10年目に向けて、本学教育のさらなる充実と発展を期待したい。

2.自己評価 総評

2022年度は、新カリキュラム稼働1年目として、教育理念・教育目標達成に向けて一貫した活動ができるよう、教員間での意識の統一や模擬授業の実施等、活動的な1年となった。科目間や各領域実習がつながりを持って学びが得られるように意識して学生にかかわり、授業案小委員会やポートフォリオ委員会などを立ち上げ、教員が自己研鑽でき教員同士で学び合うシステムを作成し実行できた。前年度課題であった授業評価も教員(外部講師も含む)にフィードバックが実施できた。実習施設とのかかわりでは、事前の打ち合わせや実習後の振り返りを実施でき学生への教育体制のもと、実習先の施設より本校の新カリキュラムの実習の考え方や内容、指導方法など指導者に対するレクチャーの機会もあり、実習施設と連携も図れている。

経営管理においては、新たに学籍管理システムやオンラインの学習環境の整備と業務の効率化に取り組むことができた。入試、広報についても動画の公開を取り組み、卒業・就職・進学に関する卒業生の就業先の評価の実施については、就職先の協力を得て、就職1年の到達状況などの調査を実施して、卒業生の傾向を把握することができるようになった。ただし、卒業生とのかかわりで、同窓会を活性化させることが課題として残っている。

以上のことから、新カリキュラムで整備した体制で稼働し始めることができた。今後は、教員の育成や研究活動への取り組みを向上させ、卒業生に対する継続的なかかわりなどを含め、現在の取り組みに対する結果をいかに評価し質の向上に努めてゆくかが課題となる。

3.各項目評価

評価項目	自己評価 評点	自己評価(概要・今後の課題)	学校 関係者 評点	学校関係者評価・意見
1.教育目的	3.23	<p>教育理念・教育目的は学校指定規則に沿い、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーと連動し、看護・看護教育・学生観は教育内容に反映できている。また、教員に対する指針として、小委員会の活動から、学生観や教育観等を授業に反映できるような仕組みを作り実践が始まった。教育理念、教育目的は、学校長の具体的な指針とともに学校パンフレット、学校ホームページなどに明示されており、オープンキャンパス、外部との会議、実習依頼など様々な場面で伝えられている。</p> <p>今後は、目的に沿った教育が実践できているかをいかに評価し実践につなげるかが課題となる。</p>	3.15	<p>教育の理念と目的は整合性がある。評価資料によれば新カリキュラムは、生物学入門から解剖生理学・病態生理学へとあり、学生にとっては素晴らしい改定である。これは卓越した知識と教育力のある現在の学校長のもとで、可能になったと思われるが、今後も継続して行くには、教員の研鑽も必要と感じる。各教科の整合性を取ることは、忙しい教員間の密なコミュニケーションが必要であるが、その意気込みが感じられる。</p>
2.教育目標	3.00	<p>教育理念、教育目的・目標は、ディプロマポリシーに明示している人物像と具体的なカリキュラムには一貫性がある。ディプロマポリシーは、新カリキュラム構築にあたり教育目標を具現化し、卒業後に貢献できる看護師像が明確になり、指針となっている。</p> <p>今後は、教育目標の達成の評価と実践をつなげることが課題となる。</p>	3.00	<p>教育目標は明確であり、学びの目標となっている。また卒業後も看護専門職として学び続けられるような指針となっている。新カリキュラムにも反映されており、本学の看護教育に資する内容になっている。今後は、より高い実践の成果が求められる。</p>

評価項目	自己評価 評価点	自己評価(概要・今後の課題)	学校 関係者 評価点	学校関係者評価・意見
3.教育課程 経営	3.85	<p>新カリキュラムは、本校の特徴を活かしたカリキュラム構成となっている。教員間の意識統一や模擬授業などを実施したことで、科目間のつながりを意識する取り組みが行えた。また、科目の内容に応じ、教員の配置、実習施設の開拓、実習施設との情報共有など実習体制を整備することが出来た。今後は、教育活動における成果や課題の可視化、教員の計画的な育成に取り組むことが課題となる。</p>	3.59	<p>新カリキュラムが発足して1年目であるが、カリキュラムに関する一貫した活動を教職員が一体となって行い、その情報を発信している。また「地域・在宅看護論」「生活と文化」などの科目を開設し、特色ある看護教育を行っている。さらにオリエンテーション等によって学生、教員ともに履修の方法を理解できるように務め、一定の効果を上げている。新たな実習施設の開拓や教員の配置などの取り組みも評価できる。今後はさらなる情報の共有や教員の育成に向けて、改善計画を検討する必要がある。</p>
4.教授学習 評価過程	3.42	<p>シラバスに各科目の学習目的・学習目標を明示し授業内容に応じた授業形態の選択・工夫をした。主体的に学ぶ力を育てるために、早期よりアクティブラーニングを取り入れた授業を実施することで、学生は自ら考えて意見を出し合うことで、学びの共有が得られる工夫をしている。前年度の課題であった授業評価は、教員(外部講師も含む)にフィードバックできる体制を整備して実施することができた。今後は、その結果を評価、必要があれば改善して教育の質向上に努めることが課題となる。</p>	3.63	<p>シラバスや実習要綱に沿って評価がなされ、講師会議や学校運営会議、授業案に関する小委員会などで評価方法や基準の考え方について検討や情報共有が行われている。また学生が授業の方法や内容について評価する体制が整備されており、授業の質の向上につながることも、授業に対する学生の取り組み姿勢も確認できる。アドバイザー制を導入し、退学率が減ったことも評価できる。</p>
5.経営・ 管理過程	3.20	<p>管理者は、教育理念・目的、教育課程経営、教育評価、養成所の管理運営等についての考え方を適切に明示し、組織体制も職務分掌規程で職務権限や役割機能を明確にしている。学校運営に関わる重要事項は目的に応じて意思決定システムが明確になっている。財政基盤を確保の考え方を明確にし、図書費や備品教材費などの予算を確保し、学習・教育の質の維持・向上につなげている。医療・看護の発展や学生層の変化に合わせ、電子書籍を取り入れオンライン授業にも対応できる様、学内環境を改善し、電子書籍による調べものや動画を取り入れた学習に繋げる事ができた。学籍管理システムによる業務の効率化を図り、授業資料を電子化することで印刷時間と印刷代が減少し、業務の効率化に効果を上げている。</p>	3.20	<p>学校の指針については、設立以来の思いが明確で整合性があり、年数も重ねて盤石になっている。組織や財務情報もホームページにて公開され、教職員にも丁寧に説明されている。学習・教育環境の整備も整っている。</p> <p>アドバイザー制度やカウンセラーによる学生への対応は良好で、奨学金や各種支援制度も全学生の4分の3以上が利用している。情報提供も適切に行われており、学生の学修継続に効果を発揮している。その他学生の安全確保、個人情報保護のための体制、健康管理を担う組織体制についても十分に整っている。将来構想に基づいて、学校関係者評価や自己評価に取り組んでいる。</p>
6.入学・ 広報活動	3.67	<p>アドミッションポリシーをもとに、入学試験委員会にて入学者選抜方法の妥当性や教育効果の視点から分析や検証を行い、入試結果と進級時 GPA の相関資料を活用している。毎年、募集活動計画を策定し、入学生獲得の活動を展開している。パンフレットやホームページも見直し、入学希望者に必要な判断</p>	3.67	<p>アドミッションポリシーをもとに入学者選抜方法を設定し、分析が行われている。また GPA によるデータ分析を行い、新しい視点を導入している。広報活動も活発に展開されており、入学希望者が関心を寄せるような内容となっている。オープンキャンパスも精力的に実施しており、積極的に情報提供を行っている。</p>

評価項目	自己評価 評価点	自己評価(概要・今後の課題)	学校 関係者 評価	学校関係者評価・意見
		<p>材料を提供している。</p> <p>学生募集活動として、県内高校への訪問、公共機関等のパンフレットの設置、年5回のオープンキャンパス開催などを実施し、夏には帯屋町の大型ビジョンへ動画を公開して、より積極的な広報活動の試みをした。今後も受験生確保に向けて、創意工夫を行ってきたい。</p>		
7.卒業・ 就業・進学	3.23	<p>2022年度(6期生)の臨床1年目の到達状況調査を実施することができたが、予定していた卒業時および卒業生のアンケート調査はできていない。</p> <p>同窓会の開催や就職先への訪問は、コロナ禍の影響でできなかったが、同窓会の役員とは連絡を取り合うことで、学校行事や式典に参加を頂いた。教員は就職先での継続研修の講師などを行うことで、卒業生と継続的な関わりを持つことが出来ている。</p> <p>本校は比較的卒業生の来校が多く、来校があった際には、ケースレポートや自己成長につながる支援を行っている。</p> <p>今後は、同窓会の活動を実現し、アセスメントポリシーに沿ったアンケートの実施や分析を行って課題を明確にしていく。</p>	3.23	<p>コロナ禍で制限のある中でも可能な範囲で同窓会・同窓生との連携を保っている。形式を変更しながらでも継続していくことに意味があると思われ、今後に繋がる活動であると評価できる。今後は、卒業生への聞き取りなどを、可能な範囲で実施できることを期待する。</p>
8.地域社会 活動	3.57	<p>地域社会のニーズは、学校連絡会を通じて県内看護学校の教員間との連携、職業実践課程の外部委員との交流、そして近森会グループとの交流・連携を通じて把握することができている。</p> <p>学校に関する情報発信は、学校ホームページやパンフレット、インスタグラムなど複数の手段を用いて行っており、状況に応じた見直しも実施している。新カリキュラムでは、学生が看護の対象者を生活の視点で理解できる様に新たな教育内容を取り入れた。その為、フィールドワーク、地域実習や地域社会との関わる機会が増えた。また、献血活動をはじめボランティア活動が実施できるようになった。今後も、地域貢献という視点で学校づくりを行っていききたい。</p>	3.57	<p>社会活動の再開に合わせ、学生の活動も活発になってきていることが理解できる。SNSの活用も含め、地域活動についての情報発信が活発にされている。今後は、より積極的な活動の成果が期待される。</p>
9.研究	3.25	<p>2022年度は、研究結果を分析して発表準備を行った。看護学雑誌等への投稿は継続して出来ている。研究に関して教員は資質を備えているが、研究を計画的に実施することが難しい状況にある。組織的に研究を取り組める環境の保障等に課題が残る。</p>	3.50	<p>教員の研究活動を保障する体制は、一定程度整備されている。また教員の多くが大学院での研究経験があることなど、研究に対する指導助言や文化的素地はあると認められる。さらに何人かの教員が看護学関係の研究雑誌に論文等を発表し、研究計画書を提出するなど、研究への意欲は向上している。</p>

近森病院附属看護学校
 自己評価及び学校関係者評価 各項目平均
 (評価期間：2022年4月1日～2023年3月31日、公開年度：2023年度)

—●— 自己評価 —●— 学校関係者評価

